名古屋も靜岡も過ぎた。急行列車だからね。

話し聲もしない。

乘客は大概鼻の巢を黑くして、黃色い涎を垂れて寢てゐる。

電球が薄暗く天井に灯つてゐる。

俺は目を覺ましたのだ。

見ると俺の脇に居た二人の角袖は居なくなつてゐる。

何處へ行きやがつたかな、俺が眠入つたので安心して降りて了つたのか、見渡す所見覺えのある顏は見えない。

俺は此の暇だと思つた。

バスケットと毛布を提げて、忽ぴやかに硝子扉を開けて、次の客車を通り、聯結臺を越えて又次の客車を通りぬけ、しまひに事務室のやうな小さな車室へ來た。

退赭色のカーテンが掛かつてゐる。覗くと誰も居ない。

俺は欝いだ氣持で窓硝子を落して風を入れた。